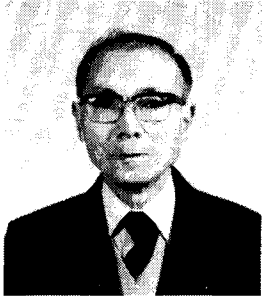


## 三つ子の魂

日本熱測定学会長 土屋 亮 吉



会員の皆様、昭和59年の新年を迎え、おめでとうございます。このたびは早速日本熱測定学会の会長という重責を担う羽目を強いられ、いまだに戸惑いを感じているものでございます。前回から2年に延びた任期が果して務めおこせるかどうか甚だ自信がありませんが、皆様の暖かい御支援を頂いて、微力ながら務めて参りたいと思います。よろしく

お願い致します。

私は元々錯体化学を専門とし、錯体化学研究会の1メンバーとして、その討論会には毎回欠かさず出席もし、発表もして参りました。ただ東北大学卒業後しばらく、故石川総雄教授のもとで無機化合物の熱力学的な研究をしておりました関係から、その後錯体の方へ研究主題が移ってから、そのエネルギーの面については常々深い関心をもっておりましたので、再現性よく、かつ故障の少ない熱分析装置が我が国でまだ充分普及していなかった昭和42年、ハンガリーから購入したいいわゆる“デリバトグラフ”を用いて、錯体の熱分析を始めたものであります。その成果の一部は、「熱測定」を看板とした討論会の末席を汚すことを躊躇しながらも、先ず第3回の熱測定討論会(昭和42年)で発表致しました。これが私の、この討論会との最初の出合いであります。その機縁で、以前からの熱測定の専門家には錯体に対する物珍らしさもあってか、早速第4回の討論会で「錯体の熱分析」と題して特別講演をやらされました。その後曲りなりにも熱分析という範疇での発表をときれ勝ちに続けているうちに、錯体の研究を本業とする方々も追々熱測定の方に顔を出されるようになり、最近では数は少ないながら、毎年必ず錯体の熱分析に関する発表が見られるようになりました。

ところで熱測定(カロリメトリー)と熱分析とは内容性格が異なり、海外でもこの両者を区別して別々の学会ないし学会誌としているところもあるようであります。文字通りの「熱測定」というイメージからしても、われわれの錯体の「熱分析」に関する研究は、「熱測定」の学

会にはこれまで何となく抵抗があって、多くは「錯塩」の学会で発表して来ました。しかし熱測定学会では、それを創立された関教授が、熱測定と熱分析とを互いに相補的なものとして含ませることを提言され今日に至っており、現に昨年10月の討論会の講演発表を主観的に眺めても、その96件中熱測定関係が44件、熱分析関係が52件と両者ほぼ拮抗しております。雑誌「熱測定」の英語名としてCalorimetry and Thermal Analysis が採用されていることも、如上の考えが受け入れられていることを物語るものでしょう。そうはいいながら、永年錯体の熱分析を手がけて来た私にとっても、本来の熱測定(カロリメトリー)はやはり夢であったのでしょうか、かつて無機化合物の熱力学から研究の道に入ったものが、ようやく最近になって固体錯体のカロリメトリーによる定量化に手を染め出したことによって、再び熱学の古巣に舞い戻った感が致します。やはり「三つ子の魂」が残っていた証拠でありましょうか。

錯塩化学討論会やタンパク質構造討論会のように、研究対象が共通の場合は、それに集う研究者数も大体決まりますが、熱測定ないし熱分析という手段は、岩石鉱物から高分子まで対象は非常に広いので、現在他の学会に属している方々の中にも、熱測定の学会と関わり合いを持つ潜在的な人数は可なりあるのではないのでしょうか。殊に熱分析を、研究の中でどの程度の重要度で用いているかによって、その成果が「熱測定」の方へもち込まれる数は流動的となりましょう。一方最近では機器の進歩によって、それぞれの機能に応じたカロリメータが市販されるようになり、また錯体化学の分野でもカロリメトリーの研究者が徐々ながら次第にその数を増しつつあるようでもあります。ときあたかも、日本熱測定学会が関教授の提唱により発足してから10年、そして熱測定討論会も今年で第20回を迎えます。その20回記念行事の1つとして、来る11月大阪地区での討論会では、マイクロミポジウム“Development of Microcalorimetry”が計画されている外、海外からの数名の招待講演者を予定し、国際色をも盛り上げようと準備中であります。この機会に会員数の増加を念じつつ、日本熱測定学会の益々の発展を期待したいものであります。